

。ときめきリーフノベル

## 刺青師の言葉

文・高安義郎  
絵・芝 章一

良太は刺青師を尋ねた。背中に豹の模様を彫りたかったのだ。刺青師は言った。

「なに豹だと」

「はい豹です。あの冷たい面構えと強靱な肢体。ぼくの憧れなんです」

良太は熱っぽく語った。

良太が豹を好きになったのは三年前ど前だった。きっかけは果敢にシマウマを襲うドキュメンタリー番組を見た時からだが、なぜこれほど好きになったのか自分でも判らない。日本中の動物園を尋ね歩いては何枚も写真を撮り部屋中に貼りつけた。やがて写真では物足りなくなり、自分自身が豹になりたくなったのだ。刺青師は言った。

「わしは浮気の手伝いなどせん」

「いいえ浮気ではありません。豹と一緒に居るのが生きがいなんです。お金なら大丈夫です」

「金の問題ではない。お前の気持ちが生かされておるのが見えるんだ。わしの目は誤魔化されんぞ」

「違います。信じてください」

「それでは三月考えろ。それでも変わらなかつたらその時は考えてやる」

そう言われて良太は三月考えた。これは彫り師が言うように浮気なのだろうか。自問したが、時間が経つに連れ豹になりたい願望は膨れてゆくのだ。そんな一途な心を良太は本物だと確信した。

「やはり決心は変わりません。後悔はしません。もし諦めたら逆に一生後悔すると思います」

良太は刺青師に言った。

「そこまで言うのならいいだろう。本物の心とは決して消えない心だぞ」

「分かっています」

良太の目は輝いていた。

それから数ヶ月が過ぎた。毎週決まった曜日には一切の残業を断り、豹の花柄の斑点を彫ってもらいに刺青師の所に通ったのだ。気が張っていたからだろうか、話に聞いていたほどの痛みを感じなかった。なぜかむしろそばゆかった。三月ほど経った夜、彫り師は言った。

「よく通ったものだ。豹の模様は今日で終わった。半年後に顔の輪郭を彫る

ことにしよう。それまで皮膚を整えるといい」

良太は家に帰ると服を脱ぎ二枚の大鏡を合わせてみた。良太の目には精神な豹の模様が背中一面を覆っていた。

「ああ、とうとう僕は豹になれるぞ」

目には感激の涙が止めどなく流れた。

良太の日々は見違えるように変化した。自分自身に気力が湧いて来るのを感じていた。仕事は順調にこなした課内トップの業績を上げたりした。半年程が過ぎたある日のことだった。良太の心に異変が起こった。偶然友人に誘われて見たドキュメンタリー映画『草原の王者』で、草原を王者のように走り鹿を追う虎の姿を目にしたのだ。虎の引き締まった胴体。パネのようなしなやかなフットワーク。そんな虎に比べると豹は猫のようにさえ思えてきたのだ。良太はさっそく刺青師を尋ねた。

「豹の斑紋を虎の縞模様に変えられませんか」

刺青師は頬を引きつらせながら怒鳴った。

「決心は変わらないと言っただろ」

「ええ、あの時は本心でした。でもぼくが本心に幸せになれるのは虎だと悟ったんです。今度こそ本物です」

刺青師は言った。

「浮気心か本心かは恋と同じで後に

なって分かるものだ。熱に浮かされてる時は本心と思ひ込んでるだけだ。本物というのは、本物に育てる心のことなんだ」

「でも僕は今の自分の心に正直に生きたいんです」

「卑怯者め。『自分に正直』と言う言葉は、浮気心に流された心を正当化する隠れ蓑だ」

「そんなことより豹の刺青、消せないでしようか」

「恋と同じだ。相手に与えた心の傷はどうするんだ。どうせお前はまた心変わりをするだろう。そんな事もあろうかと思っ一年間消えない塗料で画いた豹だ。とっとと帰れ」

はねつけられ、すぐすご家に戻った良太は裸になり鏡を見ると、なるほど肩の辺りは少し禿げ初めシマウマのような情けない姿に変わっていた。

日が経つ程に豹柄は剥がれ落ちていった。無残な模様を見つめながら、豹の何に憧れていたのだろう。豹を恋する心に恋していただけなのだろうか。そう思うと良太は大きな溜息をつき、今更ながら刺青師の言葉の重さを感じないわけにはいかなかった。

